
うねうねばなし

凄い腹筋の蛇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

うねうねばなし

【Nコード】

N6099Y

【作者名】

凄い腹筋の蛇

【あらすじ】

それは何処にでも居そうな蛇。うねうねうねうね、這って行く。今日はこの街、明日はあの街。大好きな焼酎と梅干しがあれば、きつとこんな世界でも生きて行ける。そう思わないとやっていけないだろう？

凄い腹筋の蛇が贈る不可思議ワンダフルワールド。

祖谷古手川一丁目の猫

今年の秋は短いらしい。これは天気予報士の言った言葉によるが、蛇の北岡平八郎はそれを肌で感じていた。その少し滑りのある鱗が、冷たい風の中に少し早い冬の到来を予感したのだ。

「ふん、ブルつと来ちまった。こりゃ今夜は冷えるだろうな」

シルクハットを深めに被り、蛇はうねうねと身体をうねらせる。向かう先は友人の味噌太郎の住む屋敷だ。最近はもっぱら、そこで飲むのが決まりとなっていた。

祖谷古手川一丁目の駄菓子屋の裏、県立医科大学のキャンパス沿いの一本道。今では暗渠になっているかつての笹迎え川に想いを馳せながら、シルクハットの蛇は這って行く。時折若い学生の笑い声を聞きながら、俺にもあんな時があったのだろうな、と言って笑った。

その屋敷についたのは夕方の4時を少しこえたくらいだった。賑やかな街から少し離れた場所に居を構える友人宅。この近所には珍しい日本屋敷であり、その歴史も非常に古い。近年になり流石に老朽化が目に見えて分かるようになったので、それなりに大きな改修工事をしたというが、それも蛇舅母八幡宮の宮大工に頼んだというから妙にこだわっている。

そんな屋敷の門をくぐると、庭先に煙があがっているのが見て取れた。

「おうい。味噌太郎、俺だあ」

「やあ、平八郎じゃないか。今日は早いな」

七輪の上にサンマが乗っている。滴り落ちる脂がジュツという音を立て、煙となりもうもうと空へとあがっていた。パタパタと団扇で扇ぐ味噌太郎。その姿はまるで狼煙を上げているようだ。

「黒猫が狼煙を上げるとは恐れ入った」

「恐悦至極、と返そうか」

味噌太郎はすました顔でそう言うと、扇ぐ手を休め顔を洗った。平八郎は味噌太郎の傍へとやってくると、尻尾に引っ掛けたビール袋を渡す。中には小瓶の焼酎とビール一缶、梅干しと剣先スルメにビーフジャーキーといった品が入っている。

「おいおい、これは生粋の猫にすすめるもんじゃないね」

「お互い様だ。七輪で焼いたサンマで飲もうって猫と蛇がどこにいる」

「それはそうだな。……相変わらず焼酎に梅干しか。君の好みは分からんね」

ガサガサと袋の中身を取り出す味噌太郎。平八郎には焼酎と梅干し、自分はビールとスルメだ。互いに器を寄せて軽くぶつけると、「おつかれ」と言っつて酒に口をつけた。

これがいつもの姿。

誰にも見せた事の無い、二人の姿なのだ。

二人はのんびりとただ七輪の煙を眺める。そろそろ頃合いかと味噌太郎がサンマを下ろすまで、ちびちびと酒を飲みながら。サンマを開いて二人で分け、味噌太郎が七輪に次のサンマを乗せた時に、それまで黙っていた平八郎が口を開いた。

「親父さん、大丈夫かい」

「……………」

耳を少し伏せる。しかしそれは一瞬の事で、すぐにいつもの調子に戻った。

「飼い主としてなら、問題ないさ。定刻通りに餌もくれるし、部屋を清潔に保つのは家政婦がやってくれるからな。しかしまあ、長くはないだろう」

味噌太郎はもしかしたら無理をしているのかもしれない、と平八郎は思った。

「最近、俺の言葉が分かるらしい。それだけ、死に近づいてるのさ。気をつける、そのうち君の事にも気づきかねない」

そう言っでビールを飲む味噌太郎の姿は、少し痛々しかった。

味噌太郎の飼い主は最近、妻を亡くしたらしい。早くに一人息子に先立たれたというから、今その胸にある孤独は計り知れないだろう。この頃、味噌太郎と飲む時によく話題にあがっていたのは、仕事の愚痴を味噌太郎に話すという事だった。今まではそんな事、一度も無かったというのに。

「お前に…………『死』に、惹かれちゃったのか」

「ああ。ここの家族は、どうしてか皆俺を可愛がってくれたからな。逝っちまうのも、早いってもんだよ」

クツクツク、と笑う味噌太郎。平八郎はサンマを食べながら、かつての友人の言葉を思い出す。

横切りたくなんてないのさ、俺だって。可愛がられたらそれだけ、悲しくなるだろう。

かつて一度だけ弱音を吐いたその姿に、今の味噌太郎は重なって見えた。

秋は日が落ちるのも早い。二人が静かに言葉を交わしているうちに、辺りはすっかり暮れ始めていた。サンマは旬だけあって脂も乗りうまかったハズなのだが、印象に残っていない。湿っぽくなっとな、と味噌太郎は謝ったが、なあにこういうのも悪くないさと平八郎は答えた。

門の方から、車のエンジン音が聞こえてくる。味噌太郎は息を吹きかけて、七輪をただの土塊へと変えた。

「今日は裏の藪をくぐって帰ってくれ」

「おう。……なあ、味噌太郎」

平八郎は、尋ねる。

「仕事は、楽しいか？」

聞いた所でどうなるものではない。しかし、それでも聞かずに

いられなかった。何故ならこの仕事が終わったら味噌太郎とは……もう会えなくなるだろうから。

味噌太郎は、答えた。たくさんの想いを込めて。

「悲しい事から目をそらす事で楽しくなれるのなら、この世界に楽しくない事なんて無いだろう」

「……そうか」

平八郎はそう言って、深々と帽子を被る。別れの挨拶にひとつ尻尾を振ってから、藪の中へと姿を消した。味噌太郎は背中にご主人の呼ぶ声を聞きながら……その姿が消えるまで見送り続けていた。

平八郎はうねうねと帰る。

今使ってるねぐらともそろそろお別れかもしれないな、と思いつながら。冬にうるついても目立たない所は……沖縄かな、と冗談めかして呟いた。そして、自分でも笑えない冗談は言うもんじゃないと自己嫌悪する。

通りに店を構える電気屋の展示してあるテレビが、天気予報を伝えていた。平八郎は気を取り直してそれに見入る。今日は放射冷却でかなり冷えるようだ。

「やれやれ、いい話はどこにも無いのかね」

平八郎はため息をついて空を見上げた。いつの間にか空には満天の星。その光がやけに冷たく思えて、大きく一つ身震いをする。平八郎は民家の間へと進路を変える。そしてそのまま、建物の影の中へと溶けて行った。

その後、程なくしてその街から一匹の猫と一匹の蛇が消える。しかしその事に気づく者など、誰一人として居なかった。

時計屋の日本人形

落ち葉の時期と簡単に言っても、その葉っぱの種類によって時期は変わる。蛇の北岡平八郎がその森の中の小さなお社に住み着いたのは楓の葉が落ちる時期だった。

そのお社は本当に小さく古いものだったが、毎日早朝に奇特な人間が日本酒を備えている。軽くではあるが、周囲の掃除もしていた。こりゃあいいやと平八郎は直ぐにそこを新たな根城と決めたのだ。た。

しかし、いざ住んでみると中々に面倒だ。お社の中は土埃と狸の糞に虫の死骸、ヤモリの卵の殻が転がる。まずはこれを掃除しないと住めたもんじゃない、と平八郎は杉の葉をくわえて箒として掃除を始めた。

サツ、サツ、とお社の扉を開けて掃き掃除をする。誰かが供えたワンカップを見て、これから毎日酒がただで飲めるぞとほくそ笑んだ。そしてしばらく頑張つて掃除をしていると、近くに何かの気配を感じて平八郎は物陰に隠れた。

「おんや。誰だかねえ、こんな事してんのは」

それはどこかで見た老婆だった。一体どこだったか、としばらく考えていると、老婆は小さな箒を使って平八郎が掃除していた場所を代わりに掃除する。さすがに蛇よりは上手く掃く。見る見るうちにお社は綺麗になって行った。

「掃除するなら、ちゃんと最後までやんなせや。ほったらかしたら

余計汚いるつ」

老婆はそう言ってから、お社に置かれたワンカップを見て……中身を捨てた。

「……っ!？」

そして、空いた瓶をビニール袋に入れてしまった。心の中で何かが崩れてゆく平八郎。そして恨めしそうに去って行く老婆を眺める。老婆は乳母車のような物を押しながら、来た道を帰って行った。

乳母車？ 平八郎は疑問に思う。そして思い出した。あの老婆は、この町では有名な老婆。毎日乳母車に人形を乗せ、町を歩き回って住人たちに気味悪がられていた。

「参ったな。夢の中に生きてるのか、こちらに片足を突っ込んでるのか。どちらにしても、気の毒なこった」

ため息をつく。しかしお社を綺麗にしてくれたのには感謝しないとな、と平八郎は去って行く老婆に一つ礼をした。

その日の夜。

平八郎はお社の屋根の上で、きんぴらゴボウを着に月見酒と洒落込んでいた。今日は空気も澄み切っており、月の輪郭はクッキリとしていた。それはまるで鋭利な刃物のように夜の空を円く切り取っている。

「僥倖僥倖、引越し祝いとしては上等過ぎだな」

上機嫌で月を見上げていると、平八郎はふと何かの物音を聞いた。それはとても小さく、生きた気配を感じさせない。ならば同業かと振り返ると、そこには一体の日本人形が。あの老婆が連れまわしていた人形だった。

「私も同席していいか」

「ああ。何か持って来たかい？」

そう尋ねると日本人形はその身体に似合った巾着袋から梅酒の小さなカップを二つ取り出した。

「昼間の詫びだ。私の主が迷惑をかけたからな」

「梅……ああ、偶には甘い梅もいいな。昼間の件は気にするな、あれは元々俺の物じゃねえ」

ニヤリと笑うと平八郎は尻尾を振って招く。日本人形は少しホツとした表情でお社の屋根に登った。

日本人形は丁寧に梅酒のカップの蓋を開けて平八郎に渡す。口でくわえて受け取ると、空中にカップを浮かせた。そして日本人形と乾杯すると、二人で月を見ながらそれをチビチビ飲み始める。

「……蛇よ、ここに来たのは今日が初めてか？」

「いや、町に来たのは4日前さ。しばらく彷徨いて、今日ここに住処を決めた」

「ならば、我が主の噂は聞いただらうな」

平八郎は頷いた。

噂だけなら初日にカラスから聞いた。実際に見たのは二日目、それから今日までその姿を見ていなかったが、なんとなくは覚えていた。

「時計屋の婆さんだろう。旦那さんが鬱気味だとか聞いたが」

「そうだ。もつと言えば、二人とも狂っている。あの店で狂っていないのは時計くらいのものだ」

疲れたように呟く日本人形。酔った頬に赤みが差していた。

「その理屈で言えばお前も狂ってる事にならねえか」

「ふふふ、そんなのとっくの昔だ。今では狂い過ぎて正常に戻っているくらいだよ」

そう楽しそうに笑う日本人形の姿は、少し気味が悪かった。きつと月に照らされたその姿が、美し過ぎたのだろう。平八郎はそう思っつて、頭を数回振った。

日本人形は名前を名乗らなかつた。ただ、あの老婆の娘と同じ名前だと言った。過去に生きたいと願った主の為の名前らしい。本当の名前は、もう忘れてしまったと言う。

「店の時計を、一度じっくり眺めてみるといい。一つ一つが違う時間を生きているんだよ。私も時計の一つなんだ、針は無いけどね」

「偶に休みたいと思わないか？」

「アハハ、まさか。時計が休む時は役目を終えた時さ」
そう言って梅酒を飲み干した日本人形は、少し陰のある表情になる。

「近く、また一つ役目を終える時計がある。私はそれを看取らなければならぬ。もしかしたら、それが私の役目なのかもしれないね」
「そりゃどういう意味だ？」

その問いには、答えなかった。

日本人形は軽やかに屋根を飛び降りると、平八郎に手を振る。

「今日はありがとう。この町はいい町だよ。君も気に入ると思う」

「……そうだといいな」

日本人形はその言葉に微笑むと、くるりと回って闇の中へと歩いて行った。平八郎は何だか無性に悲しい気持ちになり、カップの底に転がる梅の実を口に含む。そして、やはり梅は酸い奴がいいなと思った。

三日後。

平八郎が町を這っていると、噂好きなカラスが話かけてきた。

「旦那、旦那、もう聞いたかい？」

「ん？ なんの話だ」

「何って決まってるだろう、時計屋の心中事件さ。今この町じゃその話題で持ちきりじゃないか、旦那は聞いてないのかい？」

心中事件。

狂った夫婦と日本人形が頭をよぎった。

「火つけ心中だつてさ。近所の家によい迷惑だぜ。ん？ 旦那、どうした」

「その現場、日本人形が無かったか」

平八郎は聞かすにはいられなかった。直感的に、彼女が火をつけたのでは、と思ったのだ。もしかしたらそれを見届けるのが彼女の言う役目だったのでは、と。しかし、カラスの答えは意外なものだった。

「日本人形？ 旦那、大丈夫かい？ あのババアが連れまわしていたのは出来の悪いビニール人形だ。日本人形なんて上等なもんなんで持って無かったはずだぜ」

「……それは本当か？」

カラスは頷く。

平八郎は、言いよりの無い虚無感に包まれていた。

何となく、もう会えないような気がしたのだ。彼女は役目を終えた。きつとそうなのだ。ならば、今はもう休んでいるのだろう。わけもなく、そう思った。

何やら分からず首を捻るカラスをよそに、平八郎はあの月の下で見た彼女の姿を思い出していた。そして、また会いたいと思つてしまつた自分に苦笑いする。一体いつまで若いつもりなんだ、と。

平八郎はカラスと別れた後、お社へと戻つてお供え物の置かれた台を見る。変わらず置かれたワンカップを見ながら、今夜からは独り酒かと呟く。それが何だか、無性に寂しく思えた。

ならばこれからは、毎日供えてくれる親切な誰かの為に乾杯しよう。

そんな事を考えながら、平八郎はうねうねとお社の中へと入つて行くのだった。

鏡池で出会った少年

長閑な町の外れにある、通称『鏡池』の水面を、一匹の蛇が泳ぐ。そのうねうねが、空を鏡写しにした水面を、これまたうねうねと切っていく。空を行くトンビは狙いを定めていたが、途中で何かに気づいて狙うのを止めた。

ああ、あれは違う。

あれは蛇の形をした何か。

それは平八郎を見かけた別の生き物たちも同様だった。あれは違う。だから無害だし無益なんだ、と。

だから、平八郎は今日も一人だ。これはずっと変わらない世界のルール。時折その法則が乱れる事はあるものの、じきにあるべき姿に戻っていく。それで構わないし、悲しいとも平八郎は思わない。水面をうねうね泳いでいれば全てを忘れる事が出来たのだ。

しかしその日、珍しくその法則を乱す者があらわれた。平八郎が気持ち良く泳いだ後、岸に上がって一つため息をついて「いつかやりたいバタフライ」と呟いた時。一人の少年がそれを目撃して驚いていた。

「蛇が喋った……」

おや、と平八郎は振り向く。そこにはボサボサの頭をした華奢な少年が立っていた。黄ばんだシャツに、所々黒く汚れたズボンをは

いており、平八郎は一目でワケありだと気づいた。

「最近は何だか喋るのさ。オウムやインコに負けてられないからな」

フフン、と笑うと少年は不思議そうな顔をする。

「喋れても、蛇はオウムに勝てないでしょ」

「……頭の回る子供は嫌いだ」

平八郎が拗ねると、初めて少年は笑った。楽しそうに、腹を抱えて。しかし次の瞬間、その腹を押さえて顔を歪める。

「……つつ、あ、あはは…痛う」

「どうした、怪我が」

少年は首を振る。そして、地面に力無く身体を横たえた。

「最近、変わったお客さんが多くて大変なんだ。お医者さんには行くなって言われてるから治んなくて」

それを聞いて、平八郎は暗い表情をする。コイツはきっと、この世界から外れたいんだろう。だからこの姿を見れたし、話しかけようとしたのだ。ならば平八郎の役割としては道先案内が妥当な所ではあるが。

そんな仕事には興味が無かった。

「事情があるなら話してみる。どうせ身投げでもしに来たんだろう？ 死ぬ前にスッキリしてみるといい。安心しろ、誰にも言わない」

さ

少年はまたしても驚く。目を見開いて、額に脂汗を浮かべた。何故知っているのか……しかしそんな事、どうでもいいのかもしい。どうせ相手は蛇。他言なんかしないだろう。

「あ、あの……」

言いかけた、次の瞬間。遠くの方から誰かの怒鳴り声が響いてきた。

「うおらあ、どこ行きやがった！ 客が待ってんだろおっ！」

少年が、身を縮込ませて震える。平八郎はそんな少年に優しく声をかけた。

「安心しな。今のお前はこちら側の住人だ。奴にやあ見つけられんさ」

平八郎の言った通りだった。遠くからこちらへ歩いて来た恰幅のいい男は、少年のすぐそばを通りながら何も気づかずに通り過ぎて行った。

「何故？ 僕は一体……」

「何故と聞かれてもな。そう言うもんだとしか答えられん」

平八郎はそう言いながら、どこかから取り出したビニール袋の中から、白いフィルムに包まれたキャンディを出した。そしてそれを、少年に差し出す。

見た所ガリガリだからな。まずはこれ食べて元気を出すんだ。

……まあ、俺はオツサンだから子供の好きそうな物なんてこれくらいしか思いつかなかったんだが。

それは、ミルクキャンディ。以前、平八郎が大好きな薄荷飴と間違えて買った物だった。少年はそれを受け取ると急いで口に入れる。そして、涙を流して舐め始めた。

まったく、なんてツラだ。

平八郎は今持っている食料を出せるだけ出して、少年に与えた。

夕方になった。

少年は草村で眠っていた。平八郎はその姿を眺めた後、ゆっくりとその場を後にする。うねうねうねうね、這っていった。

そして、一件の民家にたどり着く。

暗がり、大小の人影が歪に交じり合う姿が、壁に映っていた。そこに、一際大きな影があらわれる。それは身の丈3メートルはあるうかという大蛇の影だった。

人影は、背後の大蛇に気づかない。ただ、その中の大きな影に大蛇が食らいつくと、何度か大きく痙攣をしてからピクリとも動かなくなつた。

家の中は静けさに包まれる。そして、次に子供たちの悲鳴が響き渡った。

それから一週間がたったある日の事だ。

あれから平八郎と共に池のそばの小屋に身を隠していた少年が、平八郎と一緒に池の水で身体を洗っていると、遠くの方に大人たちの姿を発見した。皆、長い棒のような物を持って池をさらっているようだ。その少し離れた所には小さな子供たちがいて、その顔ぶれに少年は見覚えがあった。

「美奈、早苗、有紀……皆、何で外に出られたんだろう」

「ありゃあ警察だなあ。大方、保護されたんだろうよ」

途端に少年の顔が輝き出した。それを見て、平八郎は頃合いかと頷く。

「よし、今から行って皆を安心させてやれ。まだお前なら戻れる」

「うん、分かった！ 僕、ちょっと行ってくるよ！」

少年は駆け出した。

後ろを振り返る事も無く。

そして、平八郎はその背中を眺めながら微笑んでいた。

ああ、行っちまえ。お前にゃこっちは似合わねえ。

そう言うってから、平八郎はうねうねと草村の中へと姿を消して行った。

それからしばらくした昼下がりに、平八郎は鏡池の水面をいつものようにうねうねと泳いでいた。それを狙うものなど居るわけもなく、平八郎は気持ちよく水面を波立たせ、空の景色を割って遊んでいた。

そして、岸にあがって一息ついた時。見上げるとそこには、綺麗な服を着た一人の少女が立っていた。少女は誰かを探すかのようにキョロキョロと辺りを見渡しながら……

平八郎のすぐそばを、通り過ぎて行く。

「さよならだ、お嬢ちゃん。お前さんにはもう、ここは必要ないだろっ」

去って行く少女の姿を見ながら、平八郎はそう呟いた。そして、満足そうに頷いてからうねうねとお社へと帰って行くのだった。

平八郎は今日も一人だ。

これはずっと変わらない世界のルール。時折その法則が乱れる事はあるものの、じきにあるべき姿に戻って行く。それで構わないし、悲しいとも平八郎は思わない。むしろこうした別れがあるのだから、幸せなのではないかと思っていた。

桜の木の下の蛙

暗がりを照らすのは提灯の灯り。一匹の蛇の影が、山道を細長く伸びて行く。行き交うのは人の形をした何かであり、決して人ではない。

コオロギの鳴き声が、今日は一際激しく響く。喧嘩でもしているのだろう。

蛇の平八郎は道を連なる提灯を頼りに、うねうねと這って行く。この闇は特別で、迷いやすいのだ。前からやってくる焼かれた老婆を器用に避けながら、平八郎は道を踏み外さないように慎重に進んでいた。

そして、平八郎は少し開けた場所に出る。そこには小さな屋台が立ち並んであり、まるで祭りの出店のようだ。着物を着た螭螂やドレスに身を包んだ白鳥たちが、そこかしこで店を出している。平八郎はそのうちの一件の店に立ち寄ると、店の主に声をかけた。

「俺だ。一枚、持って来たぜ」

「おう、待ってたぞ」

出てきたのは顔の無い坊主だった。平八郎の渡したビニール袋の中から、何やら細長い物を取り出して手に取る。そして、顔の表面のシワを歪ませた。

「えらく上等じゃないか。いい魂でも吸ったか」

「いらん詮索はするな。で、幾らで買い取るんだ？」

「ヒヒヒ、東八つだなあ。こりゃいい薬が出来る」

坊主が手にしたのは、蛇の抜け皮である。よほど貴重なものらしく、直ぐに上等な箱にしまった。そしてビニール袋に札束をいれて平八郎に手渡す。平八郎はつまらなさそうにそれを受け取ると、そのまま店を出ようとした。

そこに、坊主が声をかける。

「平八郎、酒か？」

「ん？ ああ、三郎の店に寄ろうと思ってるが、どうした」

「ああ……実はなあ」

坊主は言いにくそうに言葉につまる。少し考えてから、口を開いた。

「また里に下りて帰って来ねえ。悪いが、見かけたら帰るようになかけてくれねえか。今回はちと長すぎる」

「チツ、またかよ。分かった、酒が買えねえのは俺も困るからな」
これで何度目だ、とウンザリしていた。これだから、半端者は困る。生前の記憶なぞ邪魔にしなければならないというのに。

「頼むぜ、伍長」

「戦争は終わった、その呼び方はやめろ」

面白くなさそうに平八郎は言い捨てると、憂鬱そうに来た道を戻

って行った。

(邪魔にしかならねえんだ、本当に……)
そんな事を、つぶやきながら。

うねうねと森を抜けて、平八郎は小高い丘へとやって来る。奴が行くとしたらここしか思いつかない、と思っただけで来たが、その予想は当たっていたようだ。

そこには大きな桜の木が立っていた。その幹に寄りかかるように一匹の蛙が二本の足で立っている。平八郎は静かに、そのそばへと這って行った。

「三郎。花見にや時期が悪すぎるぞ」

「……平八郎、か」

三郎と呼ばれた蛙は静かに振り返る。少し疲れたような顔で、笑った。

「桜の木の下で待ってるって約束したんだ。だから、しばらく帰れないよ」

「一体、いつまで待ち続けるつもりだ。お前の故郷の桜はとっくに焼かれちゃっただろうが」

「分かってるよ。これはただの感傷さ。ただ、もう少しここに居させてくれないか。もう少しだけでいいんだ」

「チツ……」

平八郎はそれ以上何も言えなかった。こんな事だから、お前はさつさと死んじまったんだ。そんな事を思いながら、苦々しい顔をする平八郎。そして、死して尚想い続ける愚直なこの男を、羨ましく思ってもいた。

手放せば、強くなれると思っていた。だから手放したし、その事を後悔した事は無い。しかし目の前の男はその真逆を行き、今でもそれを大切にしていた。

その姿が、何故か平八郎には眩しく思えたのだ。それが無性に悔しく、そして悲しかった。

月の無い闇の中、誰も来ない桜の下で三郎と平八郎は佇んでいた。身を切るような冷たい風が吹いても、微動だにしない。ただその闇の向こう、そのまた向こうに何かを夢想していた。

そして……三郎が、口を開く。

「来なかった、な……」

それは、どこかスツキリしたような、寂しげな声だった。

「待たせた。じゃあ、帰ろうか」

「……ああ」

平八郎がそう答えた、その時。空から何かがヒラヒラと落ちて来た。はて、これは何だと三郎も見上げる。空中でそれを掴みとると、まじまじと見つめた。

それは、一枚の桜の花びら。

枯れているハズの桜の木から、舞い落ちてきた桜の花びらだった。

三郎は、ポタポタと涙を流す。恋人の名前と同じ名前の木の下、花咲く頃に交わした約束を思い、こぼれ落ちる涙を止められなかった。

「平…八郎、すまん……涙が」

「いいさ。泣けるなら、泣いた方がいい。それはお前が守り抜いた弱さだ」

「う…ううあああああ！」

三郎は泣いた。

闇の中、桜の花びらを握りしめて。

そんな三郎を、平八郎はただ見守り続けていた。在りし日の三郎

と、その花の名を持つ少女を思い出しながら。そして、無事に帰してやれなかった事をすまなく思うのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6099y/>

うねうねばなし

2011年11月22日02時00分発行